



小唄 雜考

赤井村

荒

赳

彦

(四)

先づ「これを募集した最初の意圖」からして間違つてゐたのではないかとさういふことはないと思ふのが誤りだ

即ち『地方産業の大宗たる炭礦の全貌を通俗平明な民謡の形式によつて満天に呼びかけ其清新激刺たる産業日本の氣分を紹介す』

と同時に、之を唄ふことによつて明朗なる炭礦兒の矜持を誇負せしめ其間美しい勞資の協調と飛躍的なる能率増進に資せん』との意圖であり目的であつたのである。誠に結構な企であるが、これを小唄に依つて求めるることは一寸お門遠ひの感がなからうかなりの無理ではなからうか

『小唄とは何ぞや』別に義がある際ではないでないが、小唄はどこまでも小唄であつて大唄小唄ではないでない。内容から見ればどこも内輪のものであり消極的のものであつて演説的のものでなく自分自身の情的のものであつて大衆的『意智的』のものではないでない。したがつてはどこまでも自分の縦言であつて『一人のそれ自身』以上のものであつてはならない。

秋立つ頃 渡邊武門 可く、海へ、山へと出懸け人達で込み合ふ中を絶えず枝歌子の姪二人

秋立つて四五朝夕の涼來た、満員だらうと思つたりを帶びた鮫川は岸の竹林に入ると開け放しの窓から

も、日中の暑さは却つて土星君に向ひ合ふて席を定められた。

舟遊を試みる、午前七時早さに秋の氣配を感ずれども對星君の明るかな顔が見えて、句

は行にトンネル程不快なるものはないトンネルを出ると

カット照る殘暑の陽に目が痛い、匂はれて初めて舟を漕ぐ自

分が漕いた方が俳味があつて面白からうと断る、實は時折真菰の中に突き入れたとする處へ、取つて返した

星君に向ひ合ふて席を定められた。

先月來遊なされた普羅先生は不安でもあり愉快でも相手にしやへり續けるが姉さんは舟宿へ着いたの居る對星君をうながして乗流の使ひ手でも敵ひ譯けがです、決して附け火は私志へ遣はした書面に、風雲

機の五平太が追付き、民五郎の加勢は腕捕ひとなつたが、彦頭の武平を語らひ親羽後の地へと思つたが京都

院及最高學府の處方箋集め大成せる皮膚病特効藥

す、しらべも等其他皮膚病に卓効あり。

九州別府市鷹乃園岩里天然堂

一週間に赤箱・金五圓・黒箱・金參

天下の名湯別府温泉で名高い。岩里家の家傳祕藥

は男女血氣・ヨシケ・淋病消渴に奇効の効果あ

りどんな頑固な疾患でも短時間に根治が出来且つ

の樂をして迷惑はなし。名藥別府淋藥の御服用に

り幸福を得られん事を希望致します。

一、坑夫百名募集中

年齢四十才以下にして工手學校卒業程度の

智能を有し身体意志共堅固なるもの

右自信あるもの至急申込まるべし

赤井村小川郷驛前

益々急なる事が判り、取つて倒された

も其時には會津屋兄弟がしたのちやありません

弟が父の前に着けられた句

が我等の前に着けられた句

帳を手にして首をかしげて

出来て丁つた事は仕方がない者がある

大角和尚は例の無頓着で

「出来て丁つた事は仕方

ない、ちやが是程の騒ぎを

の件をして氏家のお前さん

の計へ送つた歸り、又柳屋

へ寄つて一杯やうながら女

達への話で種ヶ島を持った

の身内のあばたの鐵といふ

若い者が、恐しく美しい女

の件をして氏家のお前さん</

